

# 滑川道夫読書指導論における児童文化的視点

足立幸子

## 1. はじめに

本稿の目的は、滑川道夫読書指導論成立史における児童文化的視点の意義・役割を明らかにすることである。

いくつかの先行研究によって、すでに滑川の読書指導論における児童文化的視点の存在が指摘されてきている。桑原(1993)は、「……本格的に読書指導と取り組んだのは、……戦前の教育科学研究会で、……児童文学を中心とする『児童文化』的視点から、子どもの読書指導に興味をつよく感ずるようになった。わたしの心をとらえていた綴り方・読み方・読書は、一面において、国語教育の志向線をもつものではあったが、児童文化的アプローチに重い魅力を感じていた。……わたしにとって、子どもの読書の問題は、児童文化論の中心命題であった。いまでもその方向を失うまいと思っている。その点では、本書に読書文化論的意味をもたせたつもりである。」<sup>1</sup>という滑川の代表的著作『現代の読書指導』(1976)の「はしがき」を引用し、「児童文化と国語教育」(『児童文化論』所収)や「読書指導」(『児童文化』所収)の論考の存在を示して、滑川が「すでに戦前から児童文化への関心を強め、その広い視野から読書指導論を展開してきた。」<sup>2</sup>ことについて言及している<sup>2</sup>。野地(1978)も、「滑川道夫氏は、『生活読み』の立場をふまえると同時に、『児童文化』的視点を持ち、子どもの読書の問題を児童文化論の中心命題として、たえず児童文化的アプローチを試みられた。これら『生活読み』の基本的立場と『児童文化』的視点とは、滑川道夫氏の読書指導論を骨格の確かな、肉づきのしっかりしたものとたらしめている。」<sup>3</sup>という見解を示している<sup>3</sup>。

これらの先行研究の指摘は、滑川道夫読書指導論における児童文化的視点の重要性を提示したと言えよう。児童文化的視点の検討は、滑川道夫読書指導論の立脚点を明らかにし、国語教育における読書指導論の視野を問い直す意義を持っている。本研究ではこれらの先行研究の指摘をふまえて、具体的に児童文化的視点が滑川の読書指導論の成立に際してどのように生かされているのかを、目的論・教材論の点から究明することを目的とする。特に読書指導論の根底となる目的論を中心に取り上げる。

## 2. 目的論における児童文化的視点

ここでは、滑川道夫読書指導論の目的論に焦点をあてて、児童文化的視点の果たした役割を明らかにしていく。

滑川は1957年以来、一貫して読書指導を「読書による生活指導をいう。自己の人生を読書によって充実させ、現代社会生活に適應する読書力と、人間の読書による形成を具象的・計画的に助成する指導である。」<sup>4</sup>と定義づけて、読書指導の最終的な目的を「生活指導」であるとしてきた。足立（1997）では、この「生活指導」観が、滑川が行った生活綴方の実践の中で追求した「生活指導」観と同じであることを指摘した。本稿では、更に児童文化も同じ「生活指導」観に基づいていることを考察していく。このことは言い換えれば、滑川的生活綴方・児童文化・読書指導の業績を「生活指導」の観点から全体的に把握しようとするものである。滑川は、初期の北方教育運動の推進者として、児童文学の歴史研究者として、読書指導論の先駆者として、それぞれに研究され評価されてきた。本稿では、教育者であり教育研究者である滑川が、これらの広範な活動を通して、どのような子供を理想としてどのような教育を行おうとしていたかということ、すなわち、教育の目的観を探ることになる。読書指導の目的論も、この教育の目的観に沿って構成されていると考えられる。

## 2-1. 「社会的存在者」としての児童観

上述のような問題意識から、滑川の児童観に着目する。児童観は目的論に密接に関わるものであると想定される。桑原（1993）は「子どもへの慈愛に発し、それが児童文化への関心とつながっている。」<sup>5</sup>と述べており、滑川の児童文化への関心が滑川の児童観に基づくものであることを示唆している。まず、滑川がどのような児童観を持ち、その児童観がどのようにして児童文化への関心へと繋がっていったのかを明らかにすることが必要である。

滑川は『児童文化論』（1970）の中で、「近代的児童文化の成立は『児童の発見』と『児童性の尊重』を基盤にしているけれども、児童観が、心理的存在者としての『児童』をとらえることから、社会的存在者としての『児童』をみとめるという『発展』過程においてその前進が可能となっているのである。」<sup>6</sup>という認識を示している。叙述の中の「心理的存在者」・「社会的存在者」という対比に着目して、児童観を検討してみたい。滑川のこのような叙述については、これより以前の論文に溯ることができる。「童心主義児童文学における『童心』の探究」（1961）の中で、大正後半期の童心主義文学を「おしつぶされていた児童から、子どもの尊重をみつけだし、児童性を、童心を、見すえることは一応正しかった。しかし、それを至上視し近づきがたく理想化したり、すくなくとも、固定させてとらえたところに、童心主義のもろさがすでに内蔵されていたのである。……『童心』を祭りあげずに、現実の生活のなかに見すえて追求しなければならなかったのだ。心理的な存在者としての童心の追求に終わって、社会的な存在者としての、『発達』を見失ったのである。」<sup>7</sup>と分析し、「この生活性の弱いひよわな童心主義文学は、つぎに起こる生活主義の動向から批判される。」<sup>8</sup>としている。つまり、滑川は、表1のように、童心主義の「心理的存在者」としての児童観を批判し、「社会的存在者」としてとらえる生活主義児童文学への転換を評価しているのである。童心主義の「現実離れ」した「ひ

よわ」な点が批判の理由であり、反対に生活主義の「現実の生活」や「生活性」に評価を与えている。

表1 児童文学と児童観

	童心主義児童文学	生活主義児童文学
児童観	心理的存在者	社会的存在者
批判・評価を表す言葉	現実離れ、もろさ、ひよわ	現実の生活、生活性

同じような構図の批判は、処女作『文学形象の綴方教育』（1931）<sup>9</sup>にまで溯ることができる。この著書は、綴方の教育の実践を世に問うたものであり、滑川の児童観の原点が示されているので、やや詳しく考察することにする。第一章は、形式主義時代・自由発表主義時代・写生主義時代・文芸主義時代・生活主義時代の各項目からなる「綴方教育の史的考察」から始まっている。しかし、滑川のねらいは、単に時代的変遷を追うことではなく、綴方で現実の生活を切り拓く「生活指導」を行うという自分の立場を表明することであった。すなわち、第二章では、「文芸的思潮に対する検討」と「生活的思潮に対する検討」を押し進め、文芸的思潮を乗り越えた生活的思潮に自らの実践の立脚点を見出している。滑川は、「文芸的思潮の功績として先づ第一に指摘しなければならないのは、個性の表現を強調した点である。伝統に圧迫され、形式に桎梏され続けた児童自身の姿が、自由な雰囲気解放されたのである。潑刺とした個性が綴文にまで表現されるやうになった。」という見解を示している。しかし、一方で「綴方の作品を文芸作品とのみ観る」明らかな「謬見」によって、「児童の浪漫性と感傷性に向つて最上級の表現効果を発揮させることが創作の名をもつて呼ばれた」と分析する。「リアリテイの乏しい、むしろ出鱈目な空想を以て純真な童心の発露なりとし、」「感傷的非現実的であり」「童心を至上視してゐる」ものであったと指摘する。このように、一旦文芸主義の歴史的意義を認めながらも、「現実の生活」の観点からの批判を行っているのは、表1に掲げた児童文学の構図と同じである。「感傷的」「非現実的」「童心を至上視」という言葉も、「現実離れ」「ひよわ」とほぼ同義である。

以上をまとめると、滑川は、「感傷的非現実的であり」「童心を至上視してゐる」文芸主義的綴方を批判して、「現実の生活」を綴ることによって生活指導を行う生活主義的綴方を実践の立脚点とした。このことは言い換えると、滑川が教師として活動を始める当初から、「心理的存在者」としての児童観ではなく「社会的存在者」としての児童観を持っていることを示しており、児童文化に対する認識も綴方・児童文学と同様に、「社会的存在者」としての児童観から生まれたと結論づけることができる。

## 2-2. 児童文化の性質と内容

前述のような児童観を持った滑川は、『児童文化』は、おとなの『文化』に対立する

ものではなく、国民文化に縦につながるものとしてとらえなければならない。……子どもが、おとなとちがった別世界に生活しているのではなく、おなじ社会のなかで、やがておとなになる発達過程をあゆんでいる社会的存在者としてとらえなければならない。『児童文化』も『国民文化』のひとつの形態である。』<sup>10</sup>と児童文化をとらえている。それでは、「文化」とはどのようなものであろうか。波多野(1961)は「昭和の初年」の児童文化運動を回想して、次のように「文化」を説明している。

文化を児童文化との関連について考えるとき、これを三つの意義範囲で考えるのがわかりやすい。第一に、それを「自然」に対立させてみることである。自然に対立した意味での「文化」は、人間のつくり出すいっさいのものに対していわれる。……第二は、物質文化に対する精神文化として、文化を考えることである。……第三は、「野蛮」に対する文化である。……しかし、野蛮も第一の語義からいえば「文化」の一種なのだ。この第三の語義では、文化は「文化的」なものとなり、価値をふくむものとなる。それは「非文化的」なものを排除する。しかし、排除するというのは、研究から排除するのではなく、むしろ積極的に研究して、これを排除すべく「努力」するのである。わたしたちが、児童文化をつかいだしたのは、第三の意味においてである。だから、児童の生活のなかにある「非文化的」なものを見出し、それを排除して、児童本来の文化をつくり出せるように配慮しよう、という運動と解してもらってよい。<sup>11</sup>

滑川もこの文章を引用して、「これ以上つけ加えることも解説する必要もないと思われる。」<sup>12</sup>と述べている。この引用をもとに、滑川の考える児童文化の性質について論じていくことにする。最も重要なことは、波多野が第三の語義として提示したように、児童文化(運動)の性質が中立的なものではなく、「価値」的な判断を含んでいるということである。児童文化は、大人とともに社会生活を営んでいる児童の生活を望ましいものにしようとする、極めて価値的な認識を伴ったものなのである。滑川も「児童文化の貧困は、とりもなおさず国民文化の貧困につながる。……国民の、あるいは人間の新しい希望・理想から子どもを見直し、児童文化を見直していかなければならない。」<sup>13</sup>と述べており、児童文化を価値的なものにしようとしていた。先に述べた児童観との関連で、この児童文化の性質を論じてみることにする。滑川が批判した童心主義の児童観では、童心を至上視する。童心が最もよいものとされるので、それ以上に望ましいものにしようとしていく価値への志向性は生まれてこない。波多野は、「非文化的」なものを排除することによって児童文化を向上させようとしているが、滑川はさらに「文化的」なものを積極的に選択し評価することによって、児童文化を向上させようとした。1939～1942年の文部省社会教育局嘱託推薦図書調査委員の任務、1950年代の読書指導論の著作<sup>14</sup>への良書目録の掲載、毎年刊行された「よい本のリスト」の作成など一連の良書選択の仕事は、読書指導に関係して、「文化的」なものを積極的に選択し評価した活動と解釈することができる。

次に、児童文化の内容について検討する。滑川は児童文化を(1)児童の創造的活動の所産としての文化、(2)児童に継承・伝達すべき文化、(3)児童文化を助成する施

設・機関、に類別し「(1)の児童の創造的活動の所産としての文化は、児童文化の根源的な概念である。」と位置づけている<sup>15</sup>。なぜなら「児童自身が制作した文芸・絵画……等の完成せる形象のみを問題にするのではなくして、かく生産せしめたところの、即ち文化形象を母胎として支持してゐる児童の生活、存在の仕方に関して問題が横はるのである。」という文言からも明らかなように、児童の現実の生活に対する指導に根本的に関係しているからである。滑川が実践してきた一連の生活主義の綴方は、(1)の代表的な児童文化ととらえられる。滑川は、児童に生活を綴らせることによって、自らの生活を切り拓いていく力をつけさせようとしており、そのことを「生活指導」という語で表現したのである。すなわち、児童が自分自身の生活をよりよいものにしていこうとするように導く「生活指導」が、児童文化運動の中心課題であった。

また、滑川は「(1)を児童自身の『育つ文化』とすれば、この(2)(3)は、児童へ『与える』文化と呼ぶことが出来る」<sup>16</sup>としている。前出の波多野は、第二の語義からは除外されてしまう物質文化を、「文化財」という概念で児童文化の中に取り入れた。「第二の語義は、児童文化とどう関連するか……この問題を解決するために考え出された概念が『文化財』の概念である。……で、児童文化運動は、児童にあたえられる『文化財』を文化的にすることによって、児童の生活そのものをのぞましいものにしようとする運動」<sup>17</sup>であると結論づけている。したがって、児童の生活に根ざしながら具体的な「文化財」をどのように与えていくかが、『与える』文化』に関する最重要課題であった。滑川は、『与える』文化』の中では、児童文学などの児童読物を重視した。どのような文化財をどのように与えようとしたか、検討していきたい。「児童文化と国語教育」(1941)<sup>18</sup>は、読書指導に関する考えを表明した最初の論考である。2章だてになっており、「第二章 児童文化と国語教育実践」の中で「一 読書指導」「二 児童文化としての綴方」の2節が設定されている。後者の「二 児童文化としての綴方」は、『育つ』文化』について論じられている。前者の「一 読書指導」は、『与える』文化』について論じられている。文化財である児童読物について、どのようなものを与えたらよいのかが中心的な問題として取り上げられている。注目すべきところは、「文芸主義」から「生活主義」へと綴方の時代認識と同様の論法を用いている点である。「現在は童心至上主義の『童話期』から、生活主義の『生活童話期』への転換の様相を示してゐる時期とも見られる。』<sup>19</sup>として、「生活童話」に焦点をあてている。「生活童話は児童の生活に深く根ざす興味をねらつてゐるから、空想的な若しくは童心的な筋の展開からくる興味とは区別されるものがある。自分の生活の外にある興味と自分の生活そのものから見出される興味とのちがひがある。いはゞ自分が生活を考へ、建設する興味が生活童話に見出される。」<sup>20</sup>と生活童話を評価している。結局「生活童話」を読ませるのも、生活指導を行うためであった。「(引用者注、生活を考へ建設する)興味を発見させるには指導がいる。教科書だけの勉強からは生れないで生活勉強から生れる。結局つきつめていくと、本を読む指導の奥の生活指導の問題である。読書指導としては、生活的な意味と興味とを示唆し、指摘し、時には説話し、解説し、在り方を教示して興味を引出すやうにしなければならない。』<sup>21</sup>

という叙述からも明らかなように、望ましい児童文化財の1つである生活童話をどのように扱うかということをめぐる、「読書における生活指導」としての読書指導の目的論が形成されたのである。

### 3. 教材論における児童文化的視点

滑川道夫読書指導論における教材とは、児童文化的視点から言えば、児童文化を向上させる児童文化財であるところの良質の児童文学、児童読物である。それをどのように判断し、いかに選択していくかが教材論になる。前述のように、児童文化に関する活動には価値的な性質があった。従って滑川の教材論も、悪質なものを切り捨て良質なものを選択する、あるいは、望ましくないものを望ましい方向に変えていく、という価値観を伴った活動にならざるを得ない。それでは、滑川はどのような読物を価値あるものとしていただろうか。ここでは、滑川の価値基準を探るための1つの手段として、山本有三を取り上げてみたい。

滑川は児童文化に関心を持ち、とりわけ、児童文学について見識を持っていた。多様な作家について論じているが、特に評価をしていたのは山本有三に対してである。滑川がいかに有三を評価していたかは、例えば以下のようなことから窺える。滑川の良書目録の中には、有三監修の「日本少国民文庫」が取り上げられている<sup>22</sup>。また、有三監修の雑誌『銀河』については、滑川自身が編集委員長となって有三を援助し、「良心的な雑誌であった」という認識を示している<sup>23</sup>。さらには、作品集と伝記からなる『山本有三読本』を執筆し、有三作品を広めようとした。では、具体的にどのような基準から一すなわちこれが前述の児童文化の価値基準に関係するわけであるが—滑川は有三を評価していたのであろうか。

有三の作品について、滑川は「作品は下積みの中から光を求めつづける人間主義的理想主義的生き方を追及して、社会的正義感に訴えるものである。また、小説の中で苦闘しながら生活を拓いていく意志的少年像をしばしば扱っている」<sup>24</sup>と述べている。この「生活を拓いていく」少年像は、滑川の「現実の生活」における「社会的存在者」としての児童観と重なっていると解釈することができる。また、「下積みの中から光を求めつづける人間主義的理想主義的生き方を追及し」たこと、「社会的正義感に訴えるものである」ことを評価していると見ることができる。

重複する部分もあるが、別のところでは、「有三文学は、現実におし寄せる苦悩にもうちひしがれずに、光を求めてたたかっていく庶民的な人間に対するふかい愛情がそそがれ、意志的な人間尊重の精神と社会正義が貫流しているからである。このヒューマンイズムが、有三の諸作品にさまざまなすがたであられる。」<sup>25</sup>と評価している。つまり、滑川は「社会的存在者」である子供たちが「現実におし寄せる苦悩にもうちひしがれずに、光を求めてたたかって」生きていくことを望んでいた。この生き方は、北方教育運動の先駆者となった滑川が秋田の子供たちに望んだ生き方と同じである。そのような子供たちを育てるために、「意志的な人間尊重の精神と社会主義」や「ヒューマンイズム」があらわ

れるような作品が、良質の文学として価値づけられていた。また、「有三文学は、そのときの刺激的興味や叙情によって読者をひきつける文学でなく、多くの読者に思慮をはたらかせ、人生の叡知を呼ぶ知性にうったえて、その底から興味をわきださせる」<sup>26</sup>と言う。読者の思慮をはたらかせるものや、人生の叡知を知性にうったえるものが、望ましい文化であったわけである。

このように、滑川の児童読物に対する価値基準には、「社会的存在」である児童に、現実の生活を切り拓いていかなせるような作品であることが求められていた。換言すれば、有三作品を読ませることが生活を切り拓かせる「生活指導」になり得るものであるからこそ、滑川は有三を評価していたのである。

#### 4. おわりに

本稿では、滑川道夫読書指導論における児童文化的視点の役割について、目的論を中心に、教材論についても考察を進めてきた。

目的論としては、まず、児童観に着目した。児童文化の成立の基盤となっている児童観は「心理的存在者」ではなく「社会的存在者」であること、また、この児童観が生活綴方の実践、児童文学の史的考察にも貫かれていることを確認した。次に、児童文化の性質と内容について言及した。児童文化は「非文化的」なものを排除し、「文化的」なものにしようとする、極めて価値的な認識を伴ったものであることを論じ、その価値を実現するという目的が、読書指導論の目的論になっていることを明らかにした。さらに、良質の文化財をどのように与えるかを説いたところに、滑川の読書指導論が成立したことを指摘した。

教材論としては、児童文化財の中心である児童読物の選択について論じた。選択に際しては、価値判断が働かなければならない。滑川が価値判断の基準としたものは、山本有三の作品のように、現実の生活における「社会的存在者」としての人間の姿を描いており、社会の中で自分の生活を切り拓いていけるようなもの、つまりそれを読むことによって「生活指導」が行われ得るかどうかという点であった。

これらの考察を通して、以下の点を結論として提出したい。児童文化に対する滑川の関心は、「社会的存在者」としての児童観を確立し、児童の生活指導への目的論を確実なものとした。さらに児童文化財としての児童読物の研究と選択の行為は、滑川の「生活指導」観に形を与えて、読書指導論を形成させたのである。

#### 注

- 1 滑川 (1976) 1頁。ここでは、桑原 (1993) の引用よりもさらに短く引用した。
- 2 桑原 (1993)、58～59頁。
- 3 野地 (1978)、105頁。
- 4 滑川 (1957)、478～479頁、辞典における記述。著書としては滑川 (1959a) 以来この定義を引用し続けている。
- 5 桑原 (1993)、58頁。

- 6 滑川 (1970)、45頁。
- 7 滑川 (1961)、後に滑川 (1965) に所収、24頁。
- 8 滑川 (1961)、後に滑川 (1965) に所収、23頁。
- 9 滑川 (1931)、1～37頁。
- 10 滑川 (1970)、35頁。
- 11 波多野 (1961)、4～5頁。
- 12 滑川 (1970)、29頁。
- 13 滑川 (1970)、35頁。
- 14 例えば、滑川 (1954)、滑川 (1957) など。
- 15 滑川 (1941)、113頁。
- 16 滑川 (1941)、114頁。
- 17 波多野 (1961)、5頁。
- 18 滑川 (1941)、79～187頁。
- 19 滑川 (1941)、162頁。
- 20 滑川 (1941)、163頁。
- 21 滑川 (1941)、163頁。( ) 内は引用者による。
- 22 滑川 (1959a)、404頁。
- 23 滑川 (1959b)、290頁。
- 24 滑川 (1988)、778頁。
- 25 滑川 (1959b)、8頁。
- 26 滑川 (1959b)、8頁。

#### 引用文献

- 足立幸子 (1997) 「滑川道夫読書指導論研究」日本読書学会『読書科学』第159号
- 波多野完治 (1961) 「児童文化とはなにか—回想と希望—」坪田譲治他『子どもの生活と文化』弘文堂
- 桑原 隆 (1993) 「読書指導論の軌跡」日本国語教育学会『月刊国語教育研究』第254号
- 滑川道夫 (1931) 『文学形象の綴方教育』人文書房
- 滑川道夫 (1941) 「児童文化と国語教育」国語科教育学会編『児童文化論』岩波書店
- 滑川道夫 (1954) 『子どもの読書をどうみちびくか』牧書店
- 滑川道夫 (1957) 「読書指導」西尾実編『国語教育辞典』朝倉書店
- 滑川道夫 (1959a) 『読書指導』牧書店
- 滑川道夫 (1959b) 『山本有三読本—その生涯と作品—』学習研究社
- 滑川道夫 (1961) 「童心主義児童文学における『童心』の探究」東京女子大学日本文学部『日本文学』第17号
- 滑川道夫 (1965) 『児童文学と読書指導』牧書店
- 滑川道夫 (1970) 『児童文化論』東京堂出版
- 滑川道夫 (1976) 『現代の読書指導』明治図書
- 滑川道夫 (1988) 「山本有三」日本児童文学学会編『児童文学辞典』東京書籍
- 野地潤家 (1978) 「読書指導個体史—滑川道夫氏のばあい—」野地潤家『個性読みの探究』共文社

(あだち さちこ 筑波大学大学院 博士課程教育学研究科 人文学科)